

令和5年度

さいたま市文化財保護審議会

—第2回—

(臨時会)

日時 令和5年10月13日(金)13時30分～  
会場 西会議棟第6会議室

さいたま市教育委員会

# さいたま市文化財保護審議会次第

1 開 会

2 挨拶

3 議事録について

(1) 今回議事録署名委員選出

4 議 事

(1) 諮問事項

第1号 「奥瀬アトリエ」の指定等について

5 その他報告事項

(1) さいたま市指定文化財の審議に関する基準について

6 閉会

## さいたま市文化財保護審議会委員名簿

令和5年4月1日現在

	氏名	専門分野	肩書
1	老川 慶喜	歴史資料	立教大学名誉教授
2	大越 久子	絵画	埼玉県立近代美術館主任専門員兼学芸員
3	小茂田 美保	天然記念物	目白大学講師
4	笹森 紀己子	考古・史跡	日本考古学協会会員
5	重田 正夫	古文書・歴史資料	元埼玉県立文書館副館長
6	清水 亮	歴史資料	埼玉大学准教授
7	内藤 勝雄	彫刻・工芸品	元埼玉県立民俗文化センター所長
8	長井 まみ	保存修復	女子美術大学染織文化資源研究所研究員
9	成谷 俊明	天然記念物	元埼玉県立高校教諭
10	波多野 純	建造物	日本工業大学名誉教授
11	原 由美子	古文書	元埼玉県立文書館司書主幹
12	三田村 佳子	無形・民俗	日本民俗学会評議員
13	茂木 栄	無形・民俗	國學院大學名誉教授
14	山本 孝文	考古・史跡	日本大学教授
15	渡辺 洋子	建造物	芝浦工業大学名誉教授

任期 令和5年4月1日から令和7年3月31日まで

※            第2回さいたま市文化財保護審議会出席予定委員

## (1) その他報告事項 資料

奥瀬アトリエ指定について

- 資料 奥瀬アトリエについて（事務局作成資料） P4～P6  
埼玉県近代和風建築 P7～P10  
奥瀬アトリエ（通称「奥瀬アトリエ」）についての見解 P11～P20  
（要望書添付資料）  
埼玉県浦和高地整理組合確定図 P21  
浦和画家現存するアトリエ P23

## 奥瀬アトリエについて

### 【指定候補案件】

種別：有形文化財（建造物）

名称：奥瀬アトリエ

所在地：さいたま市浦和区高砂四丁目

所有者：個人

建築年：主屋 昭和5年(1930)

構造形式：主屋 木造2階建、切妻造、棧瓦葺

設計者：富永襄吉

施工者：下地熊次郎

#### （1）奥瀬アトリエの歴史と建築

奥瀬アトリエは、画家・奥瀬英三のアトリエ兼住居である。奥瀬は明治24年(1891)、三重県阿山郡上野村に生まれ、画家になることを志し、明治45年、上京して太平洋画会に入会する。そこで、著名な洋画家である中村不折の門弟として学び、後に、太平洋美術学校の教授として活躍。奥瀬は昭和5年(1930)、親族の中国文学者・藤堂明保の勧めで滝野川（現・東京都北区）から浦和鹿島台にアトリエ兼住居を新築した。昭和11年から一時、海軍従軍画家として中国大陆に渡るが、帰国後、生涯、鹿島台のアトリエで数多くの絵画を制作。名実ともに浦和画家のひとりである。

奥瀬アトリエの建築については、青焼図面や建築工事に関する領収書・手紙類から設計が富永襄吉、施工が下地熊次郎で、竣工が昭和5年であることが分かる。設計者である富永襄吉は、明治26年生まれ。大正5年(1916)に米国オレゴン大学建築学部卒業後、ニューヨークのマッキム・ミード&ホワイト事務所に勤務した建築家である。国内の代表作には日本メソジスト教会銀座教会、富山電気ビル（国登録有形文化財）などがある。

奥瀬アトリエは、浦和の「アトリエ村」と称された鹿島台の閑静な住宅地にある。敷地は北と東に接道する角地である。敷地中央の北寄りに位置し、南東には戦後建てられた離れが接続し、南側は庭である。東側の門をくぐり、梁間のほぼ中央にある玄関から入ると右手に応接室があり、その先にアトリエの吹抜け空間が広がる。その南に四畳半の茶室があり、西側は台所と居間である。2階は吹抜けをコの字に囲んで寝室と物置がある。

青焼図面は、1・2階平面図、立面図4面、断面図1面、伏図3面、基礎及び束石の詳細図からなる。図面によると、1階東側の玄関南には書生室があるが、現在は便所・物置に改造されている。また、アトリエの南にはベランダがあり、これが昭和10年代に茶室に改造された。そのため、元々2間×3間半あった画室は南側の半間分狭められたことになる。

アトリエ内にある階段は図面では急傾斜の梯子で描かれているが、奥瀬自身が昭和6年

に「画室」というタイトルで残した油絵によると、角度を東西方向に変えて階段があったことが分かる。現在は、北方向に階段の向きを戻し、さらにベランダを茶室に改造し、その上部2階の半間分を吹抜けに沿う通路として用いている。

アトリエ西側の居住部分についてはアトリエの大屋根と棟とを直行させる切妻屋根とし、北側街路からのファサード（外観正面）に変化を付けている。

## （2）奥瀬アトリエの文化財的価値と浦和にとっての重要性

奥瀬アトリエは吹抜けの大型アトリエを中心とする間取りで、漆喰塗りの壁に古材の梁を見せる意匠、北側採光窓、大型作品の搬出用開口部など見どころが多い。採光窓の位置などは、富永襄吉が、欧米の最先端のアトリエ建築の趣向を熟知したうえで設計したものと思われる。

アトリエのみならず玄関や、中国風の応接間の意匠も秀逸で、アールデコの建具の意匠、ステンドグラスなども注目に値する。ベランダの改造、階段の変更、居住部分の改造などが行われているが、その多くは奥瀬英三居住時のままである。

浦和画家のはじまりは、明治時代後期、画家を志し埼玉県師範学校の教諭となった福原霞外らとその教え子たちの中から優れた芸術家を輩出する土壌が浦和に育まれたことによる。さらに浦和画家が増加した経緯として、大正12年の関東大震災を契機に、東京や横浜で被災した人々が安定した台地を求め、浦和や大宮などに移住したことが挙げられる。大正期から昭和初期にかけて、耕地整理事業も進み住宅街が整備され、特に鹿島台付近は、台地上の高燥地であり、風光明媚な景観を有する別所沼を望むことができるため、絵描きたちに好まれる環境があった。美術展覧会場や東京美術学校（現・東京藝術大学）がある上野への交通の利便性がありながら牧歌的な田園風景が広がる土地柄が芸術家たちに愛され、アトリエ村とよばれる一帯を形成した。昭和6年8月18日付の「東京日日新聞」によれば、当時、40人の画家が浦和の町にアトリエを構えていたとされ、このころから地元では「鎌倉文士に浦和画家」と呼ばれるようになった。

こうしてアトリエ村は隆盛を極めたが、鹿島台の地には奥瀬アトリエを残すのみとなってしまった。浦和の地の風景と気風とを性格づける要素をなしたアトリエ村で唯一残る奥瀬アトリエは、そのアトリエ空間にかつての記憶を留め、近代美術史上きわめて重要な存在といえる。

この土地に惹かれ多くの画家が集まり、一種のコロニーを育んできた歴史は、今後、この地域の文化が発展していくうえで欠かすことの出来ない重要な資源となり得る。奥瀬アトリエは、浦和の芸術家が住み、豊かな都市環境を作り上げた時期を代表する象徴的な建物である。

## （3）奥瀬アトリエの保存に向けて

この度、所有者の事情により、令和5年12月までに解体を余儀なくされている。これま

でに曳家により、敷地内にアトリエ部分など家屋の一部を移設する計画もあったが実現しなかった。前述のとおり、奥瀬アトリエはかつて浦和画家がアトリエ村として隆盛を誇った鹿島台に残る、浦和画家のアトリエとして大変貴重な建造物であり、特に画室の漆喰や、応接室の中国風の意匠など設計の細部にこだわりをもった、市内に現存するアトリエ兼住居としては他に類を見ない建物といえる。なお「当建造物はさいたま市にとって重要なものであることは、疑いの余地はなく、調査などに関わった複数の建築の専門家からも、なんとかして保存すべき」との意見をj得ている。この緊急事態において、まずは、解体部材をとりおき、将来しかるべき場所に移築し、保存活用する道筋を模索していく必要がある。その第一段階として、市の文化財に指定して保存を図るべきと考える。

【引用・参考文献】

窪田美穂子、安野彰、渡邊愛「浦和鹿島台に遺る奥瀬英三氏のアトリエ建築について」日本建築学会大会学術講演集 F,pp.341～342, 2002.8

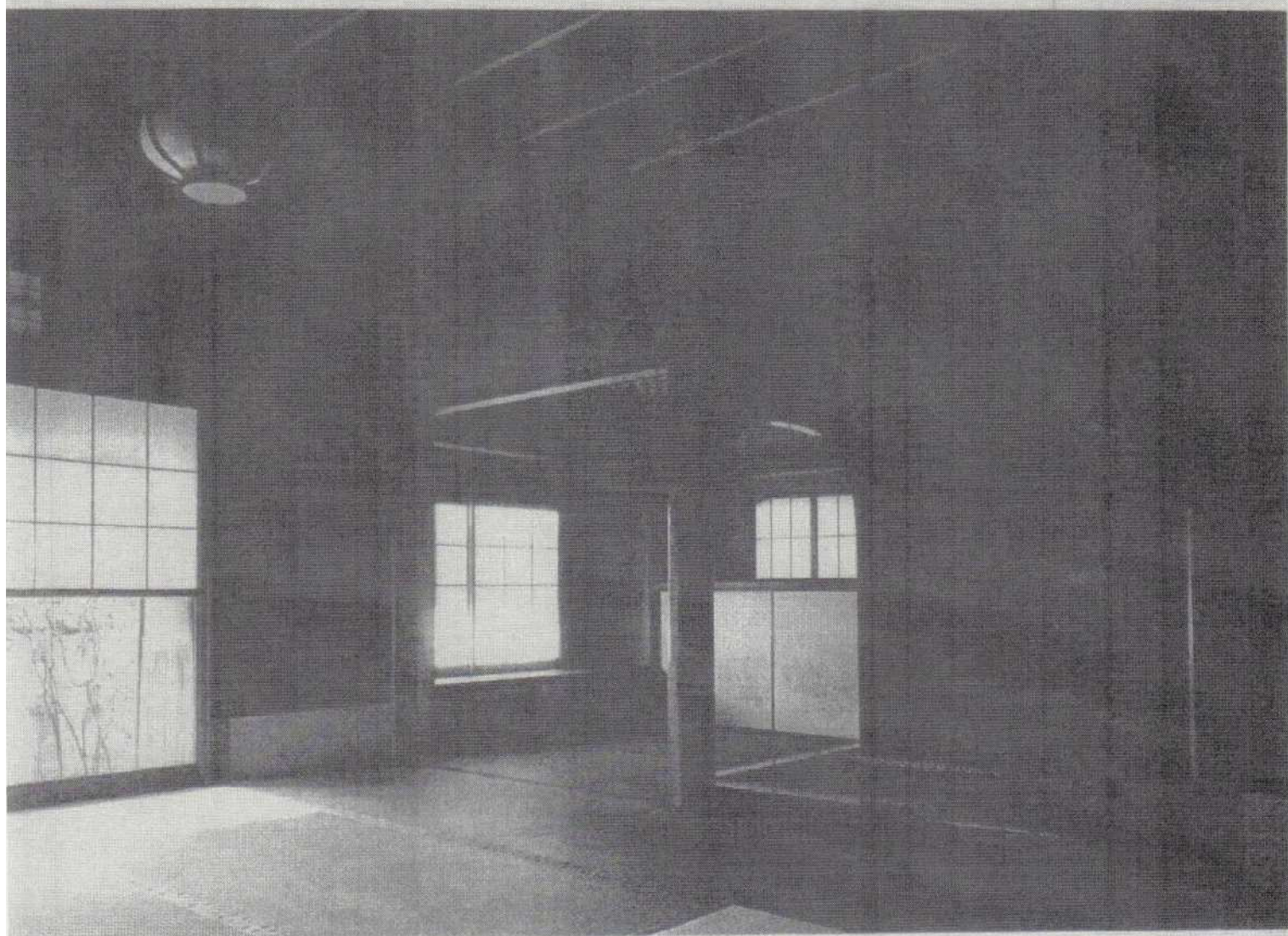
渡辺洋子「奥瀬アトリエ」『埼玉県の近代和風建築』埼玉県教育委員会,p.62～64,2017.3

小柏典華「文化財建造物継承への所有者の「思い」と「活用」」,建築討論 070 (WEBマガジン) 日本建築学会,

2023.7.9<https://medium.com/kenchikutouron/%E6%96%87%E5%8C%96%E8%B2%A1%E5%BB%BA%E9%80%A0%E7%89%A9%E7%B6%99%E6%89%BF%E3%81%B8%E3%81%AE%E6%89%80%E6%9C%89%E8%80%85%E3%81%AE-%E6%80%9D%E3%81%84-%E3%81%A8-%E6%B4%BB%E7%94%A8-16ea808a092b>

# 埼玉県の 近代和風 建築

— 埼玉県近代和風建築総合調査報告書 —



平成29年3月

埼玉県教育委員会



## 第2節 3次調査

【北足立地域】種類：住宅等（用途・類型：アトリエ）

### No.1 奥瀬アトリエ

所在地	さいたま市浦和区高砂
建築年	主屋：昭和5年（1930）
構造形式	主屋：木造2階建、切妻造、棧瓦葺
設計者	富永襄吉（青焼図面、工費請求書認定證ほか）
施工者	下地熊次郎（工事費領収證）

**沿革** 奥瀬英三氏は、明治24年（1891）生まれ、明治45年に21歳で太平洋画会に入会し、以後、昭和50年（1975）に84歳で亡くなるまで西洋画を中心に芸術活動を展開した著名な画家である。奥瀬氏は昭和6年に東京の十条から浦和市へ移り住んだ。その際自宅を兼ねたアトリエを新築し、以後亡くなるまでここで芸術活動を行っていた。現当主は英三氏の孫にあたる。青焼図面、建築工事に関する領収書や手紙が残されており、竣工は昭和5年で、設計者は富永襄吉、施工は下地熊次郎と分かる。当アトリエに関して平成13年（2001）に窪田美穂子らが調査を実施しており、その研究によると富永襄吉は明治26年生まれ、大正5年（1916）に米国オレゴン大学建築学部を卒業し、その後マッキムミードアンドホワイト事務所に勤務した建築家である。青焼図面には昭和5年11月13日付で「富永襄吉建築設計事務所」と記され、かつ昭和6年1月29日付の工事請求書認定證には「東京市麻布区田島町38番地建築士BSA 富永襄吉」とある。

**概要** 奥瀬アトリエは浦和の「絵描き村」とも呼ばれた鹿島台の閑静な住宅地にあり、敷地は北と東に接道する角地である。敷地中央の北寄りに位置し、南東に戦後建てられた離れが接続し、南側は庭である。

東側の門を潜り、梁間のほぼ中央にある玄関から入ると右手に応接室があり、その先に画室の吹抜け空間が広がる。画室南に四畳半の茶室があり、西側は台所と居間である。2階は吹抜けをコの字に囲ん

で寝室と物置がある。

青焼図面には、1・2階平面図、立面4面、断面図1面、伏図3面、基礎および束石の詳細図がある。この図面によると、1階東側の玄関南には書生室があるが、現在は便所・物置に改造されている。また画室の南にはベランダがあり、これが昭和10年代に茶室に改造された。そのため元々3間×3間半あった画室は南側の半間が狭められたことになる。

画室内にある階段は図面では急傾斜の梯子で描かれているが、奥瀬氏自身が昭和6年に「画室」というタイトルで残した油絵によると、角度を東西方向に変えて階段があったことがわかる。しかし現在はまた南北方向に階段向きを直し、さらに茶室に改造した上部の半間分を吹抜けに沿う通路として用いている。

画室西側の居住部分についてはアトリエの大屋根と棟を直交させる切妻屋根とし、北側街路からのファサードに変化をつけている。この住居部分は現当主の話では古い民家の材を持ってきて建設したという。当家には別に「美術館設計圖」と題された青焼図面がある。現アトリエとは異なる意匠で、作成者等も不明であるが、美術館（画室）と住居を別とする考え方があったのかも知れない。

**所見** 当アトリエは吹抜けの大型画室を中心とする間取であり、白漆喰塗の壁に古材の梁を見せる意匠、北側の採光窓とその隣の大型作品の搬出用開口部など見所が多い。また芸術活動に北側からの光が適しており、窪田美穂子らの指摘によると当時の

雑誌に掲載されていたアトリエ建築の半数以上に北側採光の開口部が設置されているという。設計者の富永襄吉は欧米でのアトリエ建築の趣向を熟知したうえで設計したものと思われる。

画室のみならず玄関や応接間の意匠も秀逸で、アールデコの建具の意匠、ステンドグラスなども注目に値する。

奥瀬アトリエは、ベランダの改造、階段の変更、居住部分の改造など改築が行われているものの、おおよそ当初のままの基本形を留めている。浦和に芸術家が住み、豊かな都市環境を作り上げた時期を代表する象徴的な建物である。 (渡辺洋子)

【引用・参考文献】

・窪田美穂子、安野彰、渡邊愛「浦和鹿島台に遺る奥瀬英三氏のアトリエ建築について」日本建築学会大会学術講演梗概集F, pp. 341~342, 2002. 8

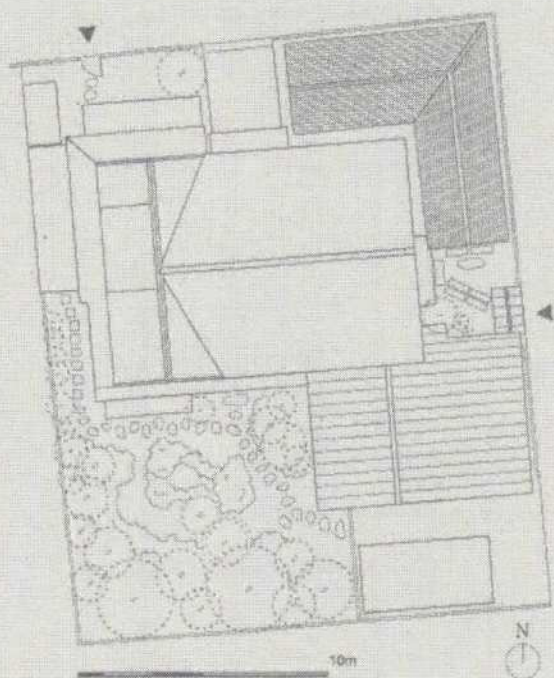


図1 配置図 1/300



写真1 外観



写真2 応接室の中国風意匠の建具



写真3 画室の吹抜け



写真4 「画室」昭和6年



写真5 現在の階段

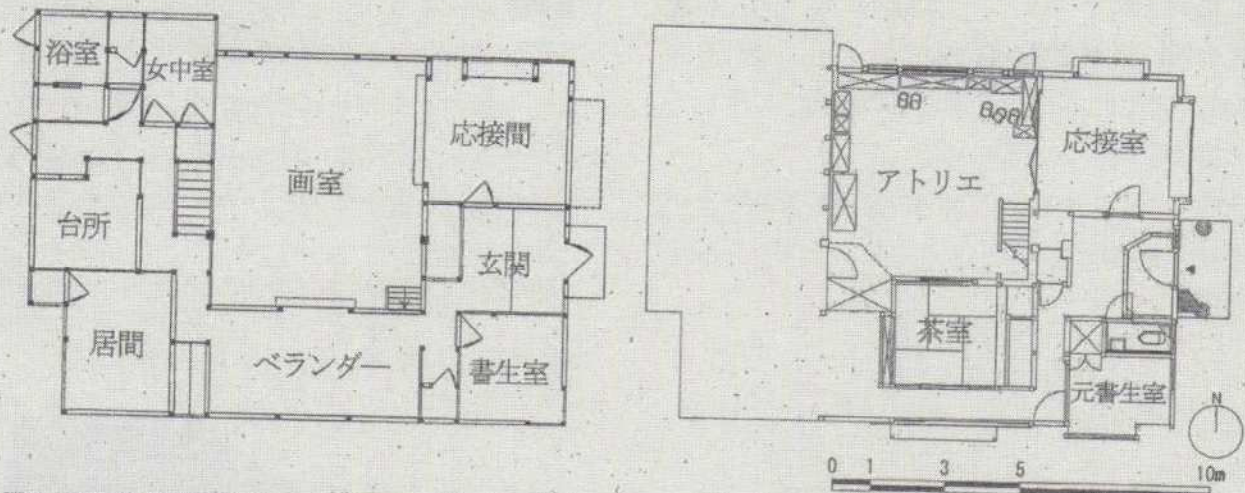


図2 主屋1階平面図 (左:青焼図面 右:現状平面) 1/200

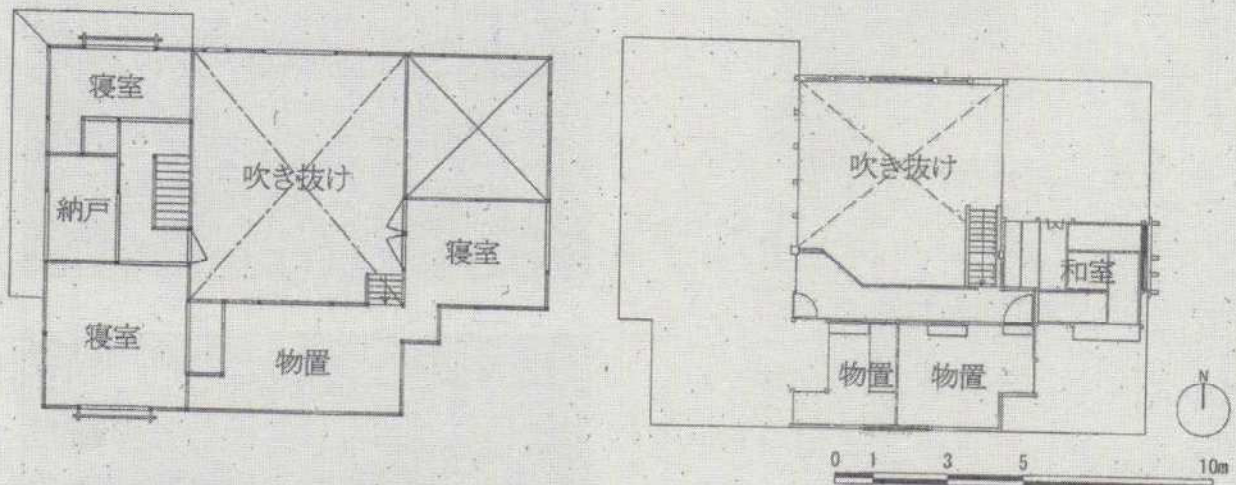


図3 主屋2階平面図 (左:青焼図面 右:現状平面) 1/200

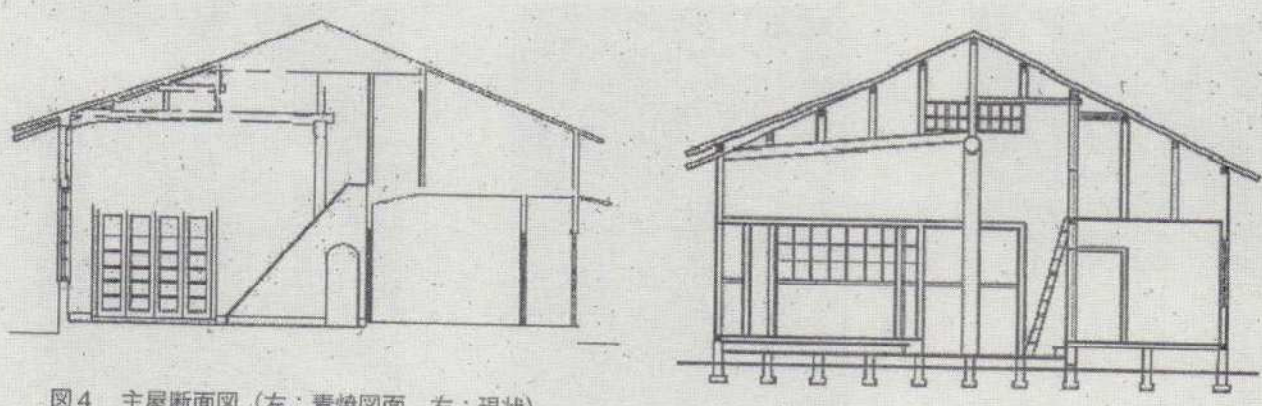


図4 主屋断面図 (左:青焼図面 右:現状)

## 奥瀬邸（通称「奥瀬アトリエ」）についての見解

日本工業大学 建築学部 建築学科 安野 彰

浦和区高砂に遺る奥瀬邸（通称「奥瀬アトリエ」）は、埼玉の近代を代表する画家、奥瀬英三とその家族が暮らしたアトリエ付住宅で、米国帰りの建築家・富永襄吉が手掛けました。竣工は、90年以上前の昭和6（1931）年初頭頃とみられます。この住宅は、埼玉県並びにさいたま市の近代史において様々な意味を持つ歴史的且つ文化的に極めて貴重な遺構と言えます。特殊な事情があり、これまで文化財の指定は避けられて来ましたが、指定して余り有る価値を有します。

市では、平成24（2012）年に「さいたま市文化芸術都市創造条例」を施行し、市民が「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」を実現させ、持続的に成長させようとしています。こうした取り組みが可能なのは、この土地に相応の文化が育まれてきた歴史があるためでしょう。文化の種は、信仰、盆栽、工芸、文学、音楽、演劇、スポーツなど様々にありますが、とりわけ美術は代表的なものとして認知されています。かつて「鎌倉文士と浦和画家」などと評されたように、土地に惹かれて多くの画家が集まり、一種のコロニーが形成された歴史は、この地域の文化が発展する上で欠かすことの出来ない重要な資源と言えるでしょう。奥瀬邸は、それを具体的且つ象徴的に示す他に変え難い資源であり共有すべき遺産です。

文化や芸術は、特に地域に根差した由緒ある歴史を大切にすることで生まれ、更に豊かさが深まるものです。そして、可能な限り「本物」を継承することで、文化の発展を支える基礎は確かなものとなります。また、その場所、その空間に身を置くことによって、先人が重ねた努力や彼らが生きた時代、そこで紡がれ積み重ねられた時間が身体全体で感じられ、訪れる者の想像力を豊かにします。更にこうした抛り所とも言べき場所や空間を介して市民に共有されていく経験は、この土地ならではの文化の固有性や独自性を涵養することになるでしょう。従って、奥瀬邸の保存活用は、市の政策目標を実現するために不可欠です。小規模ながら、市の文化的象徴になり得るとともに、人口130万人の政令指定都市が保護するに相応しい意味と価値を有しています。その価値は、これまでに得られている知見から、凡そ下記のように整理できます。

## 1. 浦和～大宮における郊外住宅地化の始まりを物語る住宅遺構

明治末に差し掛かる頃、東京や大阪等の大都市に人口が集中し、都心の住環境が悪化したため、空気や水が澄んだ郊外への移住が進むようになった。先行した大阪近郊では、帝塚山、芦屋、池田などが注目され、東京では、桜新町、田園調布、成城、国立などの開発に繋がる。何れも水はけのよい高台が健康地として好まれ、景勝の良さが重視された。そうした観点から東京の北郊でいち早く注目されたのが浦和の鹿島台である。平坦な台地の上にあり、富士を望む西では別所沼や牧場に接して、美しい田園風景が広がっていた。東の旧宿場町との間には官庁街があり、駅から近く利便性にも優れたこの土地を中心に耕地整理事業が行われ、碁盤目状の区画が浦和町域全体に及ぶことになる。この事業が呼び水となって、浦和町周辺や大宮方面においても、続々と耕地整理組合が組織され、宅地化を目論んだ整備が実現していった。一連の開発地のどこよりも早く住宅による街並みが形成された鹿島台は、浦和～大宮に於ける郊外住宅地化の始まりの地と言える。従って、この土地に遺る当時の住宅遺構は、ベッドタウンとして発展するさいたまの近代史を物語る存在と言えるだろう。そして、鹿島台のほぼ中央に位置する奥瀬邸は、その代表と言える。

## 2. 奥瀬英三の志向や感性が反映されたアトリエ付住宅

浦和では、大正末頃から画家をはじめとする多くの芸術家が移り住み、宅地開発された鹿島台や別所沼畔を中心にアトリエ村を形成したことが良く知られる。伊賀出身の洋画家・奥瀬英三（1891-1975）が、東京の十条から移り住んだ昭和6（1931）年当時の報道によれば、40人以上の画家が群居していたという。奥瀬の他にも、高田誠、小林真二、武内鶴之助、跡見泰、須田勉太、寺内萬治郎らがアトリエ付の住まいを構えた。都市化の著しい東京に接しつつ、牧歌的な田園風景が至近にあるという立地が芸術家達に好まれたとされる。小規模な浦和の町は田園都市的で、落ち着いた環境を得られる理想的なコロニーと認識されていたと考えられる。詩人の立原道造がヒアシンズハウスを別所沼畔に構想するのも、こうした土地の特質と先に移住していた知人らの存在が呼び水となったのと言えよう。

奥瀬は親戚の紹介でこの地に移住したと言うが、描く対象は風景画が多く、この地の環境に導かれた側面もあろう。事実、移住する数年前には、旅先で目にする農家の建築のつくりが風土や伝統とともにあることの美しさに言及している。具体的には、緩やかな隔てとしての生け垣、小細工の無い太い梁や厚い壁、「土地に住みついでいる安定の感じ」を愛でつつ、文化住宅の後に生まれる新しい伝統主義の住宅として、農家のあり方を重視し、未だ見ぬ「私の住宅は、時に生垣を周らした農家である」と結んでおり、このイメージが、少なからず顕しの大梁が架かる自邸画室に反映されたと考えられる。「室内」と題される作品は、竣工後間もない奥瀬邸の画室を描いたものだが、このように自邸を題材としているのは、それが奥瀬の考えを空間化した側面があるためだろう。建築家との盛んな遣り取りを経たものと伝わる。現状では塗り分け方が異なるが、白、鼠、朱、暗褐色という画室の印象的な色彩構成は、作品に描かれたものと同様で、奥瀬の色彩感覚が活かされたのかもしれない。また、応接室の東洋風インテリアも、移住の数年前に奥瀬が訪れていた朝鮮半島の伝統建築のそれを反映させた可能性を指摘できる。なお、作品に描かれた調度類も大切に残されている。

当時、多く存在したアトリエ付住宅それ自体も、この地の風景と気風を性格付ける要素となっていたが、殆どが取り壊されてしまった。鹿島台で唯一遺る奥瀬邸（奥瀬アトリエ）は、空間にそうした記憶と奥瀬の志向や感性を留めており、近代美術史上で貴重な存在と言える。

### 3. 世界的な水準の建築事務所を渡り歩いた建築家・富永襄吉による唯一現存の住宅作品

奥瀬邸（奥瀬アトリエ）の設計者となる富永襄吉（1890-?）は、大阪に生まれ、大正元（1912）年に単身渡米し、オレゴン州立大学建築学科に学んだ。その後ニューヨークに出て、世界的に知られるマクキム・ミード&ホワイト建築事務所に入り、ペンシルバニア・ホテルなどの設計を担当する。第一次世界大戦時に陸軍に志願してフランス戦線に従軍し、終戦後はバリのアメリカン・アート・トレーニングセンターで学ぶなどして1919年に帰米。21年からはヘルムリー&コーベット建築事務所に勤務し、ロンドンのブッシュ・ハウスの設計を担当している。関東大震災の報を受けてまもなく日本へ帰国し、大正13年からアントニン・レーモンド主宰の事務所（東京）に所属した。同事務所では聖路加国際病院などに携わっている。大正14年に独立し、戦前戦後を跨いで設計活動を行った。国内の代表作としては、日本メソジスト教会銀座教会、月本氏邸、富山電気ビルがある。

富永が勤めた事務所は、何れも著名で世界的な水準にあり、彼が関わった作品は、彼我の近代建築史を彩るものと言える。何れの事務所も伝統的な様式と近代性の調和を図る志向があり、富永もそれに通じる力量を持ち合わせていたと見られる。奥瀬邸は小規模ながら、そうしたデザインの質を備えており、彼が手掛けた住宅のうち、現存が確認される唯一の住宅作品として貴重である。富永が持ち合わせていた資質と能力は、住宅に於ける伝統性を重視しようとしていた奥瀬の志向にも合っていたと思われる。

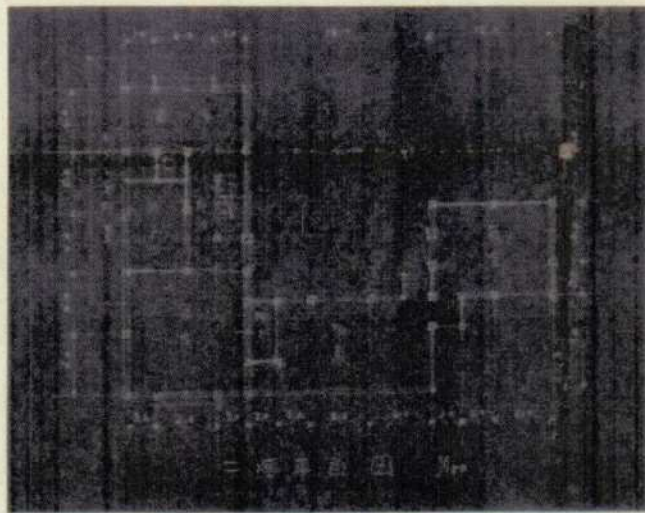
建設当時の設計図に描かれる奥瀬邸の間取りは、大きな北側採光窓がある吹抜の画室を中央に置く、画室の上方では古材による大きな梁が顕しになっており、それを支える柱は大黒柱のようで、農家の風情を醸している。また、画室の床は他よりも1尺低く、土間になぞらえたと思われる。画室からは2階の物置と寝室に上る梯子状の階段が掛かる。画室と2階の関係は、当時のアトリエ建築に典型的な構成である。画室の東側は床の間付の応接室に繋がり、南側には画室と同じ幅の「ベランダ」が続く。「ベランダ」は腰窓と吹き出しの両開きガラス建具によるサンルームのような造りで庭と画室を繋ぐ開放性があり、リビングのような場所だったと見られる。表側は画室を中心に流動的且つ立体的な空間となっている。画室より西は生活空間として、1階に居間、台所、浴室を置き、画室とは別の階段を介する2階には複数の寝室がコンパクトに収められている。外観は洋風だが、平屋に近い低さが慎ましい。外壁の下方は下見板張りで、上方は大壁としつつも両端に横棧が付加されており、全体に水平性を強調する。屋根は洋瓦葺きで大小の切妻がT字に交わる。東側2階の窓台下の腕木、一部が少し上方に跳ね上げられた北と西の屋根、西棟の小屋根などが表情を与える。こうした軽快な外観や和洋折衷は、富永が自著に掲載する住宅作品例にも見られる。

竣工まもなく、奥瀬が邸宅内を描いた作品「室内」では、階段の向きが設計図と異なるので、設計変更があったと見られる。現状はその向きが戻って、2階に廊下が追加された分だけ位置がずれる。これに伴い「ベランダ」が、縁側付の和室（茶室）になり、2階廊下の幅だけ画室側に広げられ、画室の床も当初より少し高い。応接室は、東洋風の繊細なインテリアで、窓枠に象を彫った木鼻が見られるなど、凝った意匠である。玄関は紅殻色で表面の粗い大壁が印象的である。各室のインテリアが個性的なのは、施主である奥瀬の意向が反映されているのかもしれない。それが違和感なく纏められているのは、富永の力量に依ると見られる。

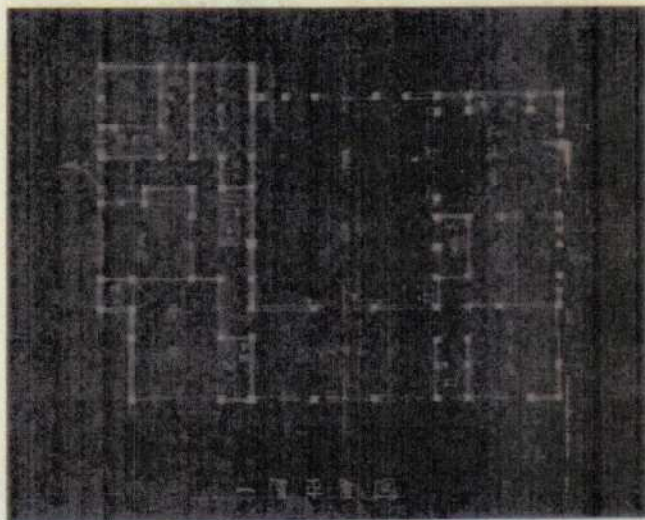
戦後の増改築に伴い、外観の下見板が一部となっているなどの改変が見られるものの、当時の中流住宅やアトリエ建築の特徴も随所に織り込まれ、富永の設計力と奥瀬の志向性が作り上げた当初の空間の骨格と質が状態良く保存されており、貴重な遺構と言える。

<参考文献>

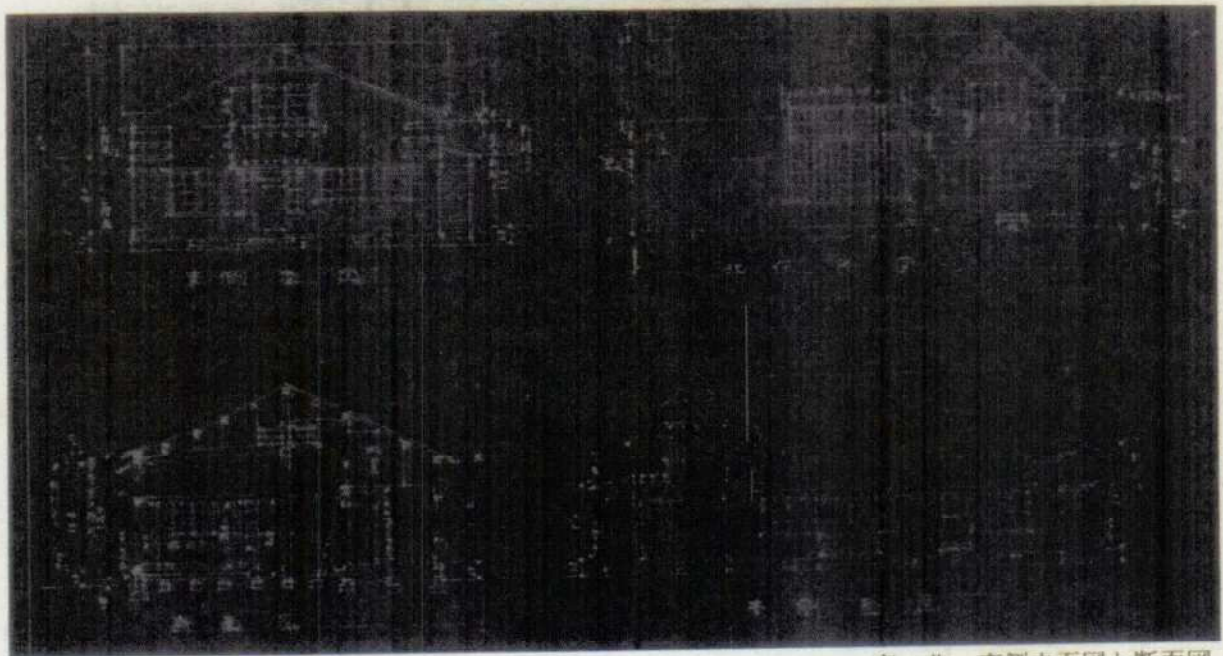
- ・英三「農家」美術新論3(3)(17)1928年3月
- ・奥瀬英三「雑林の旅(一)」美術新論3(9)(23)1928年9月
- ・富永襄吉「中流住宅建築並住宅の実例と設備」資文堂書店1933年
- ・富永襄吉「プティ・トリアノン」日本外政学会1968年
- ・「奥瀬英三展 傘寿記念」日動画廊1971年
- ・うらわ美術館編「開館記念展1 浦和画家とその時代 -寺内萬次郎・瑛九・高田誠-」うらわ美術館2000年
- ・渡邊愛「アトリエ村の形成から見た戦前期の浦和における郊外住宅地化に関する研究」文化女子大学家政学部生活造形学科住環境デザインコース 住居・インテリア専攻 卒業研究2002年3月
- ・水野隆「埼玉の画家たち」さきたま出版会2000年
- ・安野彰, 渡邊愛, 窪田美穂子「戦前期の浦和における宅地化の進捗とアトリエ村の形成」日本建築学会大会学術講演梗概集 計画系(2)2002年 pp.339-340
- ・窪田美穂子, 安野彰, 渡邊愛「浦和鹿島台に遺る奥瀬英三氏のアトリエ建築について」日本建築学会大会学術講演梗概集 計画系(2)2002年 pp.341-342
- ・埼玉県教育委員会編「埼玉県の近代和風建築: 埼玉県近代和風建築総合調査報告書」埼玉県教育委員会2017年
- ・安野彰「戦前の耕地整理事業で開発された浦和・大宮地区の住宅地について」日本建築学会大会学術講演集 建築歴史・意匠2020年 pp.175-176
- ・堀勇良「日本近代建築人名総覧 増補版」中央公論新社2022年
- ・小柏典華「文化財建造物継承への所有者の「思い」と「活用」」建築討論070 建築の再生活用学2023年7月 (<https://medium.com/kenchikutouron/文化財建造物継承への所有者の-思い-と-活用-16ea808a092b>)



2階平面図



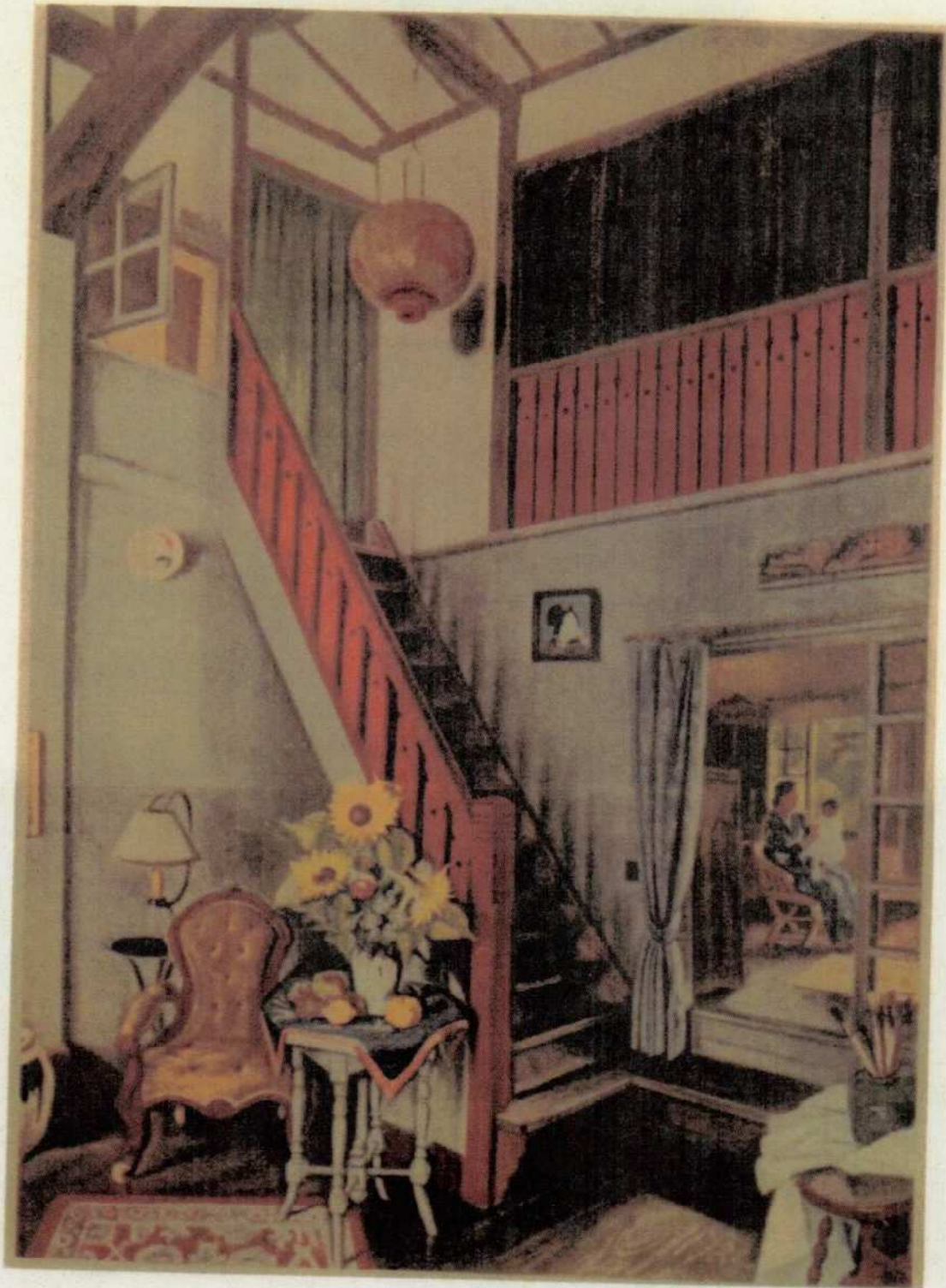
1階平面図



東、北、南側立面図と断面図

昭和5年11月の設計図の一部（奥瀬家所蔵）

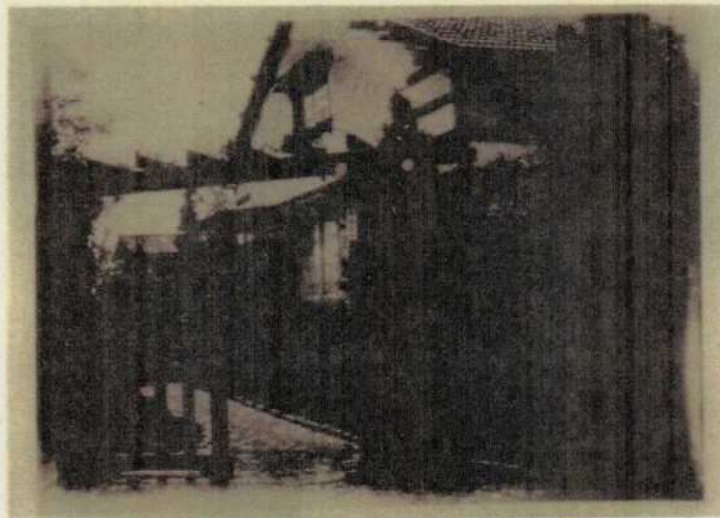




「室内」(第十二回帝展出品 昭和6年)



南の庭と外観（竣工当時／奥瀬家所蔵）



敷地北東の門と外観（竣工当時／奥瀬家所蔵）



玄関（平成12年頃／撮影：うらわ美術館）



画室見上げ（平成 12 年頃／撮影：うらわ美術館）



画室の細部（令和 5 年／撮影：安野彰）



画室階段（平成 12 年頃／撮影：うらわ美術館）



画室見下げ（平成 12 年頃／撮影：うらわ美術館）



応接室



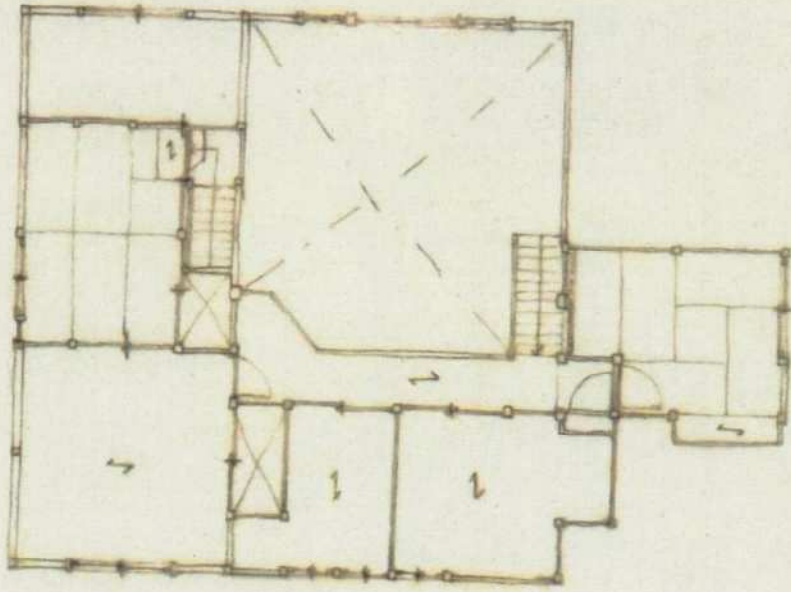
上 応接室窓枠の木鼻状の彫刻

下 玄関・廊下入口の懸魚状の彫刻

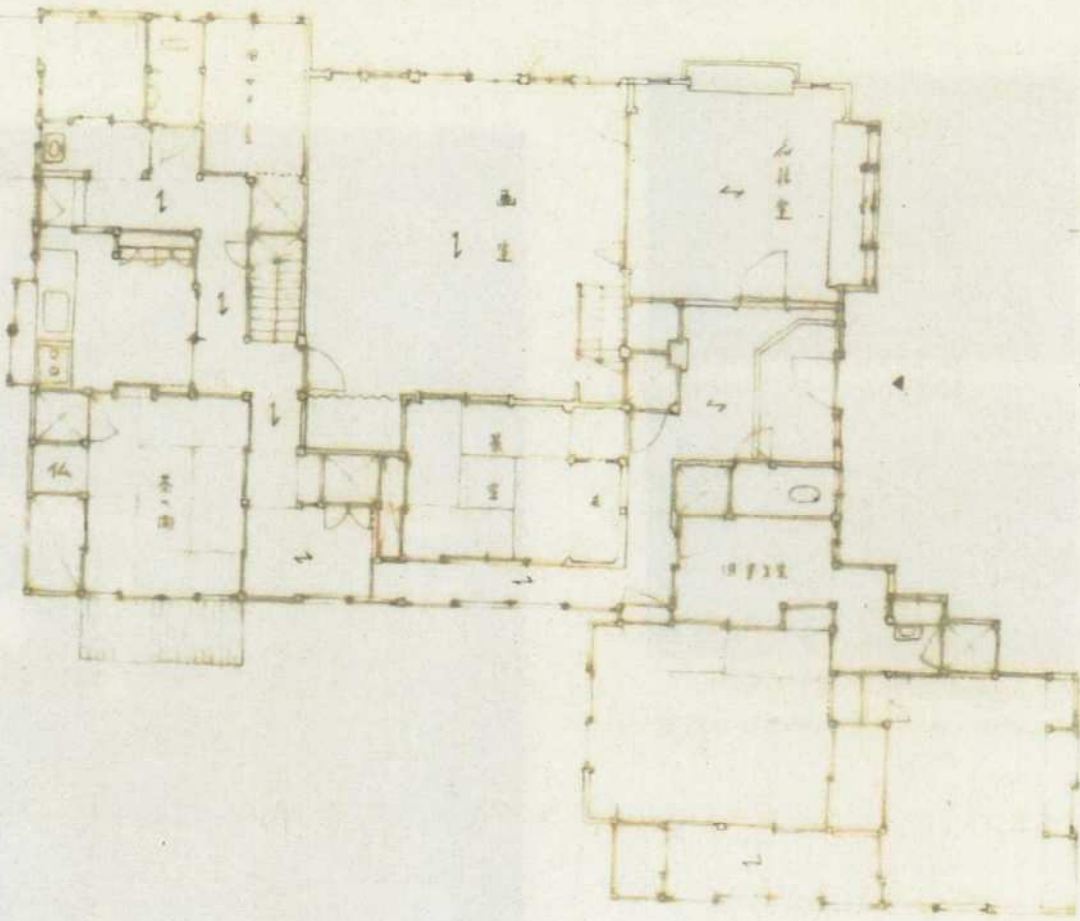


玄関

応接室・玄関内観（令和5年／撮影：安野彰）



2階



1階

奥瀬邸平面図 (平成 13 年 11 月 29 日 / 安野が目視のうえ作図)